

一：不思議の村のアスカ

その世界には海を隔てて大きな大陸が二つあって、一つは右の大陸、もう一つを左の大陸といった。

右の大陸の右の端に海沿いに、不思議な村がある。

名を、人魚の村という。

村人が海産物を生業とするごく普通の村だったが、一つだけ他と大きく違う所があった。

それはとても大きな違いで、その村の人を見たことがない人間にはにわかには信じら

れないであろう。

人魚の村の中で、あまり裕福ではない家にアスカは生まれた。

不幸にも母親は、アスカが三歳の時に病気で死んでしまい、父親が後妻に娶った女はアスカを可愛がることはなかった。

母親によく似た、クリームに近い栗色の髪と瞳と、美しい肌、優しい心を持つアスカを妬んだからである。

父親はアスカを溺愛したものの、漁師だったので年中家にいなかった。

実質、いつも家にいるのはアスカと継母、そして継母が産んだ双子の子供ドゥーガとリユーガだった。

もつともこの双子は継母の連れ子だったので、アスカより二歳年上だったしもちろん血は繋がっていなかった。

アスカ十二歳、ドゥーガとリユーガ十四歳。

双子たちは漁師らしく日に焼けたたくましい体つきになっていたが、アスカは細く華奢なままだった。

それが継母には気に入らないことの一つだった。

「うちに女はいらないよ！私一人で十分だ！あんたは来年十三歳になったら赤い実を

食べて男になつてもらうんだから、もつと体を鍛えておくれ！」

継母はいつもアスカにそう言つていた。

そう、この村では、性別は十三歳の誕生日に決まる。

それまで、子供たちには性別はない。

生まれた時から彼らの性器は両性具有のようになっており、十三歳になつた日、自ら性別を選べるのだ。

村の中央に、人魚の木と呼ばれる大木があつて、

男を希望する者はその大木になる赤い実を、女を希望する者は白い実を食べる。

そうすると半年以内に体が望んだ性別への変化を完了させるのだった。

漁師町なので男子を希望する親が多いが、何人か子供がいる家庭であれば本人の好きにさせることも多く、また十三歳までにはどちらがふさわしいか、見かけでほとんど分かるのだった。

アスカは来年、と言ってもあと一か月で十三歳。

外見は小柄で華奢で、驚くほど可愛らしいが、継母だけではなく本人も男になる道を決心していた。

「やっぱり、アスカは赤い実を食べるの？」

アスカの親友、レオンが笑顔で訪ねてきた。

燃えるような紅い髪少年。アスカより半年前に13歳を迎えて、そろそろ完璧な男になっていた。

アスカはコクリとうなづく。

「うん、ボクも男になりたい。母さんも望んでいるし、ボクも男になって、このままずっとレオンと友達でいたいんだ。」

「嬉しいこと言ってくれるなあ」

レオンはまた笑顔になって、照れ隠しにアスカの髪をグシャグシャと触った。

アスカとレオンは幼馴染。実の母親同士が仲が良かったことと、二人の生まれた時が近かったことからいつも一緒に遊んでいた。

アスカの実の母親が亡くなり、継母にいじめられている時も、レオン一家はアスカを見守り助けてくれたのでアスカは生きてこられたのだ。

アスカはレオンをただの友達としてだけではなく、心の底から尊敬している。

村長の息子として生まれ、さわやかな外見、正義感にあふれた優しい性格、天才と言ってもいいほどの頭脳、神がかった剣の腕。

（もし、世界を救う勇者という者がいたら、きっとレオンみたいな人だろう）

アスカはずっとそう思っていた。

二：アスカの夢

レオンはアスカの顔をまじまじと見ながら言った。

「ほんとにアスカは可愛い顔してるよな。この村の、いや今まで見てきた中のどの女の子よりも可愛いよ。なあ、お前が女になったら俺、嫁にもらってやるよ!」

レオンは本気とも冗談とも取れる口調で言う。

「バカなこと言わないで、レオン。ボクたちは友達同士なんだから、女になったって・・・」

（抱けないでしょ、と続けようとしたが、恥ずかしくなってやめた）

「抱けるよ。毎日だって抱ける。」

「えっ!？」

アスカの心を見透かしたように、大真面目な顔をしてレオンが言った。

「ななな、なに言ってるの〜!〜!」

顔中、体中真っ赤になるアスカ。

レオンはその様子を見て、三度ケタケタ笑った。

「ほんつとに可愛いし面白いな、お前は。まったく冗談だよ、ずっと親友の男でいてくれよアスカ。お前ほどいいやつはいないよ!なあ、いつか一緒に旅でもしないか。男同士ならきつと楽しいぞ!」

「うん!」

いっしょに旅をする・・・それは幼いころから二人でずっと言い合っていたことだった。

夢で終わらせるのではなく、アスカはそのため努力をしてきた。
体が細く小さかったので早々に体力面では諦めて、実用的な勉強を頑張った。

例えば医学、薬草学、航海術、自由になるお金なんかなかったから、村にいる医者や専門家を手伝いながら色々なことを教わって覚えた。

いつか、レオンといっしょに旅をするために。

海を渡り森を歩き山で寝て起き、男同士それはどんなに楽しいか。小さいころに実の母を亡くし、継母に虐げられて育ったアスカは、それだけを支えに生きてきたと言っても過言ではなかった。

（きつと、レオンは世界を変える人間になる！ボクはその時、側にいたいんだ・・・そして少しでも役に立ちたいんだ。だからせめて足手まといにならないように頑張らないと！）

「さ、アスカ、今日はおじさんが漁から帰る日じゃなかったか？早く家に帰らないと！」
「そうだった！」

二人が座っていた草むらから立ち上がると、レオンはアスカより二十センチは身長が伸びていて随分差があるのが分かった。

半年前に赤い実を食べてから、レオンはどんどん大きく、男らしくなっていく。

アスカは自分の貧相な体つきが、レオンと並ぶと恥ずかしく感じられた。

（もうすぐ・・・来月赤い実を食べれば、ボクだって少しは男らしくなるんだ・・・）

きつと。）

アスカはレオンに別れを告げて家路を急いだ。

年に数日しか家に帰れない父親が帰ってくるのだ。

漁師らしい、日に焼けた男らしくたくましい父親はアスカの自慢で、また、その血を引いているのだからこんな自分もいつかはそうなれるんじゃないかという期待にもつながっていた。

父親が乗っているのは村で一番の大きな船で、百人もの村の男たちがその船で遠くの海まで航海している。

魚を取ったり、異国の珍しい品物を仕入れてきたり。

この世界を分ける右の大陸と左の大陸はお互い仲が悪いのだが、交易は比較的自由に出来ていた。

船は港についていたらしく、村全体が何となくざわざわしている。いつものことだった。

しかしアスカが港の付近を通った時、ざわつき方がどことなくいつもと違っていている気がした。

「どうしたんだろう・・・」

所々から再会の喜びの声ではなくて、悲しい泣き声が上がっているのだ。

アスカはどんどん不安になっていった。

「何かあったのだろうか・・・父さん・・・！」
速足から小走りになって家に向かう。

家の前にはいつもはない荷物がいくつか積み上げてあって、父親の帰還を物語っている。

「帰って来たんだ！」

アスカが家の中に入ると驚愕の光景が目に見え込んできた。

三：父の帰還

「父さん・・・」

家の中に父親の姿はあつた。しかし、あるべきはずのものがなかった。

ぐつたりとロッキングチェアに腰かけた体には、両足と片腕がない。

片目に眼帯、頭部を包帯で覆われていて、黒く豊かな髪は無残に抜け落ちてゐる。傍らでは継母が泣き崩れている。双子の兄たちの姿はなかった。

「な・・・何があつたの・・・？」

夕日が差し込む薄暗い部屋の中をゆつくりと進むアスカ。

父親は残った片目で美しい我が子を見た。

「怪物だ……。怪物が出た……。」

継母はその言葉に一層声を荒げて泣く。

「あんな恐ろしい生き物は初めてだ……。巨大なイカとクジラが混ざったような化け物……。大きさは山ほどあった……。」

そこで父親は血を吐きながらむせた。アスカは布で父親の口の血を拭き、背中をさする。

「父さん、無理に話さなくていいよ……。早くお医者様に診せよう！ そうだ、ボク呼んでくる！」

「医者はいんだ、話せるうちに聞いてくれ！」
父親はアスカの腕を掴んだ。

「あの怪物がいたのは遠くの深い海じゃない、この村の近くの海なんだ。
俺たちは長い航海を経て、後は一日ほど風に乗って進むだけだった。
みな、無事に我が家に帰る事が出来ると喜び、安心していた・・・。」

昨日の夜明け、突然船が大きく揺れた。みなは座礁したのかと思ったが違ったんだ。
見張りが叫ぶと同時に甲板に何本もの巨大なイカの触手のようなものが伸びてきて、
みなを襲い始めた。

それは触れるだけで腕や足をもぎ取っていき・・・喰っていた・・・。」

「そんな・・・！」
アスカは真っ青になって立ちすくむ。

「百人もいた仲間たちで形が残っているのは半分、生きているのはそのまた半分だ。船は何とか無事だが、もう漁には出られないだろう……。あんな化け物がいては……。！」

ゴトツ

父親はそう言うのと、椅子から崩れ落ちて気を失った。

「あなたっ！あなたっ！」

継母が支え起こす。しかしすぐに手を離れた。

すっかり様子が変わった夫に我慢できなかったのだ。

「アスカ、お父さんをベッドに寝かしてちょうだい！」

「は・・・はい」

アスカは軽くなつてしまつた父親を抱えてベッドに横たえた。幸い息をしている・・・。
継母に、医者に見せることを相談しようとする前に、継母は冷たく言い放つた。

「ああ、これから一体どうすればいいの？ やつと帰つて来たと思つたら稼ぎがないばかりか、もう二度と働けない体になつてしまつて・・・！ しかも、この辺りでは漁が出来ないですって？

漁師になつたドウーガとリヨーガはどうしたらいいの？！」

「母さん・・・あの・・・お医者さんと呼ばないと父さんが・・・」

「医者？ 医者ですって？ そんなお金がどこにあるというの？

私たちは年に数回しか帰つてこないこの人の漁の稼ぎでギリギリ暮らしていたのよ！
それが今回少しのお金もなかった・・・。ドウーガとリヨーガも漁に出られないとな

れば、医者どころか。明日からの暮らしもままならないのよ！」

「・・・でも・・・」

何も言い返す事が出来ないアスカ。

「アンタはまだ半人前で男でも女でもなく、何の稼ぎもないんだから！」

母親は瞳を潤ませるアスカを見て、ハッとあることを思いついた。

「・・・そうだわ・・・。アンタでもお金を稼ぐ方法がある・・・。そうよ、ねえアスカ、この村で漁師にもなれないんだったら男になる必要なんてないわ。

たしか北の大陸の中央では、この村の女は高値で売れるって聞いたことがある。アンタ、女になりなさい！」